
領域名：基本科目・専門支持科目

報告者：山城 綾子

教育及び実践の課題

多読とは多くの本を読むことであり、本文献で述べられているようにその根底には、人々は読書により読むことを学ぶということがある。日本の英語教育の場でも段階的に多読用図書を読んでいく取り組みが1980年代から広がり、多聴多読が英語学習法のひとつとして認識されている。多読プログラムの具現化には、教育現場の環境整備が最重要課題であるため費用面、収集状況、管理体制、指導者養成、プログラム作成等、実践までに一定の時間を要する。本学では地道に多読図書の収集を始めているところで、多読の浸透している米国の実践例から学び前進したい。

活用した論文の概要

Rodrigo 他(2007)の文献は、43名の成人リテラシー学習者である第一言語学習者と第二言語学習者の多読プログラム実践について述べ、小学生のリーディングレベルにある成人リテラシー学習者向けプログラムの方針と構成要素、多読図書教材を提示し、読書が苦手な成人を対象に多読アプローチの実施が可能であることを示唆している。多読プログラム作成に際し、(a)リーディングの目的、(b)リーディング方法、(c)使用教材、(d)教員の役割、の4方針を考案した。プログラムは、(a)持続的黙読、(b)ブックトーク、(c)読み聞かせ、の3構成に基づく。良く整備された図書が多読プログラムの成功の鍵を握るため、図書整備の実践的な考察と類似プログラムにも活用できる方策、及び図書教材や分野の選定点を述べている。多読プログラムの実践とアンケート結果から、留意点を示した上で、教員と図書管理者は、学習者の読書嗜好を初めに調査し、学習者を惹きつける話題を提供することが多読図書の最優先事項であることや、リーディングスキルを改善するために参加している成人は、単に楽しむことを目的とした読書ではなく、リーディングスキルが上達していることを実感することで、目的を達成したいという動機があることが明らかになった。

教育及び実践への活用

本文献では、英語を母国語とする米国の教育では通常幼児から行われる多読プログラムを、読書習慣のない成人に向けて適用したことが注目する点である。多読プログラムの可能性の広がりを示唆するとともに、幼児・児童を対象とする場合と異なり、成人を対象とする場合の多読プログラムを試行錯誤する過程に於いて現実的な実践例を提示している。本文献から得た多読プログラムの学びは次の通りである。(1)多読教育用の図書教材にとらわれず、新聞、雑誌等を活用した読書を勧める。(2)図書選定に向けた事前準備及び図書選定(管理体制や学生の興味分野の分析等)を慎重に行う。(3)成人は単に楽しむことを目的とした読書の継続は難しい。(4)長期的生涯学習を視野に入れた読書習慣を形成することが理想的な多読プログラムの成功である。上記の学びを活かし英語教育の中で常に身近に読書を意識できるよう取り組む。

参考文献

Rodrigo, V., Greenberg, D., Burke, V., Hall, R., Berry, A., Brinck, T., Joseph, H., and Oby, M. (2007): Implementing an extensive reading program and library for adult literacy learners. *Reading in a Foreign Language*, 2007, Vol 19, No.2, pp.106-119.
